「幸福の条件」

　――私たちの本当の幸福はどこにあるのか――

ＮＨＫラジオ「宗教の時間」 ２０１１年５月１６日収録

（聞き手：元ＮＨＫディレクター金光寿郎、放送：２０１１年６月５日、１２日）

奥田昌道

# 【見出し】

# ●東日本大震災からの復興

**（金光）**今度の東日本の大震災というのは、日本の歴史始まって以来の大惨事のひとつではないかと思うんですが、その影響を受けて日本の人たちのいろんな喪失感だとか、これからの方向をどうしようかとか、悩んでいらっしゃる方が多いと思います。その人たちの頭の中にはこれまでの幸せな幸福な生活というものをもう一度なんとか回復したい、というようなお気持がおありではないかと思うんです。これからの私たちの幸福な生き方というのは、根本のところから考えると、どういうことになるのか、奥田先生のこれまでの信仰のご経験を踏まえたうえで、お話をお聞かせいただきたいと思います。

**（奥田）**はい、ありがとうございます。まさに今仰ったようにこの度の出来事というのは私自身にとっても大変な衝撃でございました。今まで営々と築き上げてきたものが本当に一瞬のうちに奪い去られてしまう。財産だけならまだしも命までも、たくさんの方の命が失われたという、本当にそれは私自身にとってもショックでございました。

今、仰ったようにこれから新しくスタートするにあたって何を目指して行ったらいいのか。世間では、リコンストラクションということで、もう一度美しい日本の姿を取り戻そうという、外側の復興ということは当然のことなんですけれども、それだけではなくて、やはり私たちは心の問題、内面の問題、それをここでもう一度しっかり考え直すときがきているのではないかと、そんな感想を持ちました。

# ●心の内面の回復

結局、何を拠り所として何を目指して歩んで行けばいいかということです。それからもう一つは、犠牲になった方々は一体どうなるのか、ただ失われて終りということなら、あまりにも残酷ではないかというふうに思います。

常々こういったことが起こりますと、宗教にかかわる方々は、

「それは一体、天罰であるのか」

とか、あるいは、

「神のはどこにあるのか。神が愛ならば、なんでこんなことを放っておかれるのか」

といったことが言われるけれども、私はそれに対しては、人間の側から、

「一体、神さまの御意がどこにある」

とか、

「神さまはこう考えてこうなさったんだ」

とか、そういったことは私は絶対推し量ってはいけない、それは人間の側の傲慢だというふうに思います。

ただ言えますことは、私たち生き残った人間、それからこの度の震災でも、犠牲を免れなさった方々、そういう人たちを含めて、私たち日本人全体がやはりこの度の尊い犠牲を無駄にしてはならないと、この度の尊い犠牲から何かを学びとって、新しい生き方をしていくということがこの際必要なのではないかというふうに私は考えています。

日本人は今まであまりにも外なるものを追い求めすぎていた。幸せというのは、財産をたくさん持つこと、立派な住居を持って、いい職について、子どもたちはいい学校に行ってとかいうふうに、とかくこの世での競争社会で生き抜いて自分たちが豊かな生活をする、その豊かさがどうも外なるものの豊かさというところに向きすぎていたように思います。

それに対して、やはり人間はそれを超えた逆の方向、つまり心の内面の美しさといいますか、尊さといいますか、永遠なるものと申しましょうか、そういったものを求めるべきではないか。それは単なる人間の美しい願望かというと、そうじゃなくて、やはり神さまはそれを願っていらっしゃるのではないかということを思います。

# ●ひとは霊止

人は死んでしまえばおいなのか、特に一瞬にしてあの津波に呑み込まれて、お別れも言えないで死んで行った方々、それは年とった方も若い方もあるいは子どもさんたちもみんな含めて――まぁいわばいい人も悪い人も全部いっしょくたに――虚無の中に奪い去られたという、それに対して本当にそれでいいのか、それが本当においなのか。いや、そうじゃない。人間はそんな安っぽいものではない、ということをどうしても私は、やはり長年キリストを信じてきた人間としては申し上げざるを得ないと思っております。

人間というのは肉体の死を超えて存続する、そういう霊の人ではないか、霊が宿っているのではないか。これは、『大言海』という大きな辞典がございますが、あそこの「ひと」というのを引きますと、「、霊がまる」と書いてあるんです。「霊」というのは「ひ」と読みますからね。即ち、

「ひとは神霊の止まる存在」

と、そのように古代の人は考えたのではないかと解説がついている。あぁさすがに日本の古代のひとはそこまで考えておられたのだなと、つまり、謙虚な気持でいらっしゃったのだなと思います。

# ●キリストの復活

では、人間は霊が止まって、死んだあとはどうなるのかということについては、やはり私はキリストのご復活という、それを申し上げざるを得ないんです。つまり、

「人間は死んでお終いじゃないよ、肉体の死をもって終わらない永遠の命があるんだよ」

ということをキリストはご自身の生涯をとおして顕されたということです。

よく、「復活」と申しますと、なにか死体が生き返ったような印象を持たれますけれども、そうじゃなくて、キリストの場合は、もちろん死体は無くなってしまったけれども、霊体に変貌した。肉体が生き返ったというのではなくて、イエスというあの方の中にあった霊的生命が超自然的な霊のを持って忽然と現れたという、そういう出来事であったというふうに私は受けとっているんです。

しかも、キリストはなにも自分がそういう永遠の命となって現れただけじゃなくて、

「それはあなた方に差し上げたいんだよ。あなた方にこの命を与えるために私は天から遣わされて地上にやって来たんだよ」

と、それがキリストのお心なんですね。

キリストだけが永遠の命で向こうで輝いて、我々は地獄の中で苦しむというのではなくて、どんな人も全部、キリストによって引き寄せられて向こうの世界で輝くという、そういう事態だというふうに私は受けとっています。

**（金光）**普通の人の考えだと、「人間は亡くなってしまえばそれでおい」と、そこでもう無になるみたいに考えている人が多いと思うんですが、今のお話だと、そういうことではないということですね。

**（奥田）**お終いではない。絶対にそうではありえない。それは我々人間の心にそういう願望が留まっています。誰も、「人は死んだらお終い。あとは物体になった」なんて考えていないと思うんです。慰霊祭を行ったり、黙祷を捧げたり、亡くなった方の所に花束を捧げたり──たとえば交通事故がありましても、その後長いあいだ花束が捧げられています──そういうことは、やはり人間は霊としてどこかで生きていると、それはもう染みこんでいると思うんです。それを明確なかたちで、

「ここだよ、ここだよ。こっちの世界で輝くんだよ」

と言って現してくださったのがイエス・キリストという方だったというふうに私は受けとっているんです。

# ●無条件で光の国へ

キリストは天界にいらっしゃる。しかしながら同時に、犠牲になった方々お一人おひとりのところへキリストは霊の姿で出掛けて行って、一人ひとりに寄り添ってって、キリストにすがる方にはどなたでも無条件に抱きかかえて天界へ導いていかれる、そういうお方だというふうに私は思っているんです。

それは、拒む人は仕方がありません。けれども、

「あっ、あなたはそういうお方でしたか。連れて行ってちょうだい」

と言えば、引き寄せてくださるという──磁石によって地中の中の鉄くずも全部吸い寄せられるように──キリストは愛の力で引き寄せてくださる方だと思います。

「いえ、私みたいな汚い人間は大丈夫なんですか」

「いやいや、お前さんのいろんな問題を全部解決したのが十字架だよ。なにも私は自分で十字架にかかる必要はなかったんだけれども、神さまのご命令によって、世の中で苦しんでいる人や、罪に悩んでいる人や、気付かないでも罪の中にいる方を、

まぁ、神さまに反逆しているという姿が罪なんですけれども、それを全部引き受けて、

人間たちを本当の神の子にしようと、本当に天国人にしようというご命令を受けて、地上にやって来たのが私ではないか。だから、もう『罪、罪、罪』なんて自分を責めないで、私にすがりなさい」

というのが、私の受けとったキリストさまなんです。だから、どなたでも無条件で光の国へ連れて行ってくれる。

ヨハネ伝第３章の中に、

「神はその独り子を賜ったほどに世を愛してくださった」

という、あの有名なところに、

「信ずる者が一人も滅びないで永遠の命にあずかるためである」

とあります。あそこのところでヨハネは解説しているんです。

「というのは、神さまは審かれない。光が来たのに、『光はいやだ、私は闇が好きだ』と言って、光を拒んで闇の中へ落ち込んでいく。これが審判になっている。本当の生き方をしたい人は光に吸い寄せられていく」

と、そういうことを言ってくれています。私はそのとおりだと思うんです。人間の魂というのは、自分が行きたいところへ行く。自分に似通ったところへ行く。

だから、日頃から、愛だとか、信仰だとか、その他そういう、金銀財宝ではなくて、あるいは人の欲望ではなくて、何か人のために尽くすとか、何かそういう己を超えたものを慕うような魂──無私の魂と言うかな、私無き生き方をするような、あるいは他人に尽くしてやまない方とか──そういう人たちの霊というのはキリストさまの光を見たら、

「慕わしいのはこの方だ」

と言って、もう吸い寄せられて行くんだと、私はそう受けとっているんです。

**（金光）**その永遠の命の世界ということになると、肉親で亡くなった方がいても、その肉親の方と「そこでもうストップ、これで永遠の別れ」という形でない世界があるということですか。

**（奥田）**はい、そうです。絶対にそうです。クリスチャンでない方でも、どんなお方でも、光を慕う魂は光の中へ導かれていく。そこでお会いすることができる。

私のいろんなご先祖だとか肉親だってクリスチャンはいませんでしたし、妻の場合もそうですし。子どもたち──孫が一人もう先に向こうへ行きましたけれども──そういった子どもたちも含めて向こうの世界で輝いてくれている、そこで会えるというのがものすごく大きな慰めです。それがなかったらいやですね、私は。

# ●打ち砕かれた人は顧みられる

**（金光）**人間の営々と築いたものが一瞬にして奪い去られて、いわば傲慢さを打ち砕かれたということですけれども。ただし、人間というのは、傲慢さといいますか、これはついすぐ頭をもちあげてきて、なんとか「自分が、自分が」というのが邪魔をするということになるわけでしょうね。

**（奥田）**それが「原罪」というものでしょうね。邪魔します。だから、誇り高い人はだめなんです。これは不思議なことですけれども、あまりにも賢すぎる人、あまりにも出来すぎる人、力がありすぎる人、自分に自信のありすぎる人、この方々は神さまに、「ちょっと待て」と言われることになるんです。しかし、それに対して、

「助けてください。私は何も拠り所を持ちません」

と──まぁ、病気の人もそうですね、生まれながらにいろんな障害を持って生まれた人もそうです。その他いろんなことで精神的にも打ち砕かれた人──しかし、そう言う人は、本当に神さまは特別に顧みてくださると思っています。

**（金光）**では、

「神さまのところへ私も連れて行ってください」

と、そういう言葉を本気で言えるかというと、日頃ご無沙汰していますと、なかなか……。

**（奥田）**それは非常に良心的な人ほどそういうことを仰るんですよ。私もいろんな人を知ってます。キリスト教の私のいろんな講演会なんかにもご案内するんですが、

「自分のような者が行ってよろしいんでしょうか。私はそこまでまじめな生活をしてないんです」

とか、そういうことを仰るんですよ。

「いや、いや、そういうことに気付いているだけで十分ですよ」

と、私は言うんですよね。

「キリストはそんな立派な人間を呼ぼうとは思っておられない。出来損ないを立派な人間に仕立て上げるのがキリストの──まぁ、生き甲斐といったら変だけれども──仕事なんであって、あまりにも立派すぎたら、キリストが出る幕がないじゃありませんか」

と、そんなふうに申し上げるんです。

パウロさん自身が、

「私は罪びとの」

と言ってますもの。事実、あの人はキリストを迫害したんですからね。それも宗教的熱心で迫害した。心にもなく迫害してしまったんですけれども。

それでなくたって、やはりいろんなところで人間は神さまの光に照らされたら、これはちょっと居ても立ってもいられない。そこで逃げ出してしまうのか、

「助けてください」

と言うか、それじゃないでしょうかね。

# ●任せていけば道が開けていく

**（金光）**そういうのを聞くと、まだこの世にしがみついている人間は神さまに、「助けてください」と言っても、「では、お金を貸してやるから、これで家を建てなさい」とか、そういう形の助け方ではないわけでしょ。まぁ、そういう場合も出てくるかもしれませんけれども、その今の自分の望みをそのまま実現するような形での救いということなのか、あるいは、自分自身のそういう考え方を御破算にして、

「もう一度、光の方向へ進みなさい」

と。神さまがこういう方向ではないかと仰る方向へ行かなくていかんということになるわけでしょうね。

**（奥田）**そうですね。私はそんなすごい経験というのはないけれども、確かに私も行き詰まって、本当にどなたであっても私に、

「この道を行け。お前はこの道を行けば大丈夫だ。私が責任を持つ」

と言ってくれる、そういう方に出会いたかったんです。その時にキリストを伝えてくれた方があったものだから、本当に私はそこに踏み出して行けました。それから以後というものは、あまりこの世の財産とかそんなものに対する執着はなかったですね。

というのは、キリストは、

「必要なものは添えて与えるから、まず私を求めてきなさい。神の国を求めなさい。そうすれば、必要なものは全部添えて与えられる」

と。必要なものは本当に与えられます。それまでは、自分が責任をもって家族を養い、自分がすべてをやらなければならない。自分がやっぱり責任者なんですよね。自分がやらないと、誰がやってくれるかと。

**（金光）**そう思いますよね。どう生きていくか困っている人はそこで困っているんじゃないですか。自分がやらなければいけないのに、手がかり足がかりがなくなったというところで、おそらく途方に暮れている人もいらっしゃると思うんですけれども。それが神さまの仰る方向ということになってくると……

**（奥田）**それはもう全然違いますよ。それは、「自分が、自分が」ということでやっているのと、

「私の導きによって来なさい」

というのとまず心の安らぎが違いますもの。それはもう思い煩いがないですもの。任せればいいんだから。本当に任せていけば、ちゃんと道が開けていく。これは経験してみないとわからない。ヒルティだって言ってます、

「体験しなさい、体験しなさい。誰でも経験したらいい。踏み出しなさい」

ということをさかんにヒルティが『幸福論』の中で言ってますよ。

**（金光）**そうですね。カール・ヒルティという人は、

「これは理屈ではなくて、とにかく一応そういう方向があるということを聞いたら、それを実行しなさい。そうすると体験できる」

と。

**（奥田）**はい、そう言ってます。だから、私はヒルティさんに共感するんです。

**（金光）**そういう人間のいわば思いを超えた世界のお話になってくると、やっぱり実践の世界でないとだめで、頭でいくら考えてこれに違いないと頭で作りあげたものではないわけですね。

**（奥田）**私のは頭ではありません。全然、頭ではありません。ただ、

「証明してみろ。科学的に証明しろ。学問的に裏付けてみろ」

と言われたら、

「そんなものは何もありません」

と言うだけであって、私の生活そのものなんです。

# ●自分を投げ出す

**（金光）**そういう話を聞くと、じゃぁ自分もそこへ踏み出したいと思っても、さてどう踏み出したらいいのか、日常生活でその神さまのおをどういうふうに自分で受けとればいいのか、捕まえればいいのかという……

**（奥田）**それは祈ればいいのではないでしょうか。そこで簡単に、

「主よ、私をお導きください。主よ、私に新しい道へ踏み出させてください」

と、何でも一番心の中にあるものをぶつけたらよろしいんです、飾らないで。

**（金光）**「私は困っています」と。

**（奥田）**ええ、

「私は困っています。助けてください」

と言って。

福音書に出てくるお話もそれが多いですね。たとえば、子どもさんがの病で苦しんでいると、その子の親がキリストに、

「なんとか助けてくれ。もしお出来になるなら、助けてくれ」

と言ったら、

「『お出来になるなら』なんて条件をつけるな。出来るんだ」

「はい、不信仰な私をおゆるしください」

と、そこでもう自分を投げ出しているんです。その親は、

「信無き我を憐れみたまえ」

と言いました。信仰なんて始めからあるものじゃありませんもの。いただくものですもの。

**（金光）**あっ、自分から捕まえるものではなくて……

**（奥田）**向こうがくれるわけです。全部、くれるものです、すべて。よきものは全部いただくものです。

**（金光）**で、それに気がつくと、「あっ、私はこれもいただけた、あっ、これもいただけた」と。

**（奥田）**そうです。もうすべて、これは自分のものというものは無くなってしまいます。全部賜りたるものです。健康も、知恵も、力も、その他すべて。だから、学者であれ、あるいはスポーツ選手であれ、誰であれ、「自分はこれだけのことをやった」と威張っているとだめですね。

「これは全部、神さまがくれたんだ。健康も神さまがくれた。怪我をしないでここまでやれたのはやっぱり守られたんだ」

という、そういう謙虚な心の人はどこまでも伸びていく人だと思います。だから私は、スポーツ選手なんかでも本当に徹している方は道を求める人だという気がします。無私、私無き世界というのと、そういう道を極めるというのとはなにか通じているように思いますね。

# ●出会いというのが大事

**（金光）**そこにはやはり日頃から一種のご縁というか、本当に困っているときにはそういう世界に通じている人の話を聞くとか、なにかそういうつながりがないと、頭の中ででっちあげるわけにはいかなくて、とてもだめですね。

**（奥田）**それは絶対に必要です。つながりが必要です。出会いというのが、縁というのが大事です。どなただって誰かを通してこのキリストの世界に導かれたりとか、いろんな素晴らしい本に導かれたりとか、それがきっかけになってまた新しい世界が開けていくという、そういう体験をなさっていると思うんです。頭であまり考えすぎるひとはちょっと……

**（金光）**かえって、それが邪魔をするわけですね。ということは、幸福になるためには何と何が必要ということよりも、むしろ一番大事なことはそういう世界に生きている人にお出会いするということですね。

**（奥田）**はい、そう思います。

**（金光）**本を読むよりもむしろ実際その世界で生きている方のお話を直接聞く、そういうお人柄に触れる、そういうのが一番近道ということでしょうね。

**（奥田）**はい、そうだと思います。私は本来、教育というものはそういうものだと思うんです。

「どの先生に出会った。あの先生は生涯、私の恩師だ。小学校のときに出会った先生がずっと最後まで自分のお師匠さんでいてくれる」

とか。やはり、教室は知識を授けるところではなくて、人格と人格の触れあいで、

「あの先生のような生き方をしたい。あの先生のようになりたい」

とか、それを子ども心に養われるということだと思うんです。大人になりましてもやはり、形は大人でも心はまだまだ幼いというか、真理が開けていない。そういうときに道を求めて、どなたか素晴らしい方に出会うということを求める。そしたらまた、出会いというものが与えられるのではないでしょうか、そういう願望があれば。

**（金光）**これは法学部の先生の話でしたけれども、ある理工系の学生に大学で聞いたら、どこかの中学・高校あたりで生物とか、あるいは化学なら化学が好きな先生に出会って、

「あの先生があれだけ楽しんでいらっしゃる、その道を自分も行ってみたい」

と思って大学へ来たという、そういう生徒が非常に多かったそうです。ということは、その知識ではなくて、その先生の生きている世界の味わいみたいのがなんとなく伝わって、そういうところで来たという。だから、このいわば人生の幸福というような問題でもやはり同じように、

「あの人は金持ちではないけれども、何か豊かな心を持っていらっしゃるな」

という、そういう方との接触によってというのが一番近道といえますでしょうか。

**（奥田）**よくね、

「あの人のそばに居ればほっとする」

とか、

「自分はひねくれた人間だけれど、あの人のそばにいたら素直になれる。何かほっとする」

とか、そういうことを仰る方がいらっしゃいますね。やっぱりそういう、なにか自ずとその人から内なるものがにじみ出てくる、それだと思うんです。それで、

「一体、あなたはどうしてそんな姿でいられるの」

と聞かれると、

「いや、実は私はもうキリストさまに全部委ねてきたらこんなふうになってしまったんですよ」

と。それが本当じゃないでしょうかね。私はそんなふうに思ってますので。

# ●失われないものに目を向けなさい

**（金光）**その世界は自分で「ああなりたい、こうなりたい」という計らいを離れた世界ですから、この世だけの命の世界ではもちろんないという……。

**（奥田）**そうですね。やはり、この世の命にこだわっていたら、それは仕方がありません。この世の命はどうせ百年なんですもの。しかも、年寄れば、あちらこちらが傷たんでくるし、思うように動きませんしね、そういう衰えていくのが人間なのに、その中でいよいよ溌剌と、清々と、生き生きと生きるという、みどりみどりして生きるという、それをくれるのは人間からは出てこないと思います。

**（金光）**それはそうですよね。

**（奥田）**はい、絶対に出てこない。

**（金光）**自分で勝手に生まれてきた人は一人もいないわけですから。

**（奥田）**そうなんです。生まれてくるときも裸だし、向こうへ行くときも裸で去っていく。だから、

「衣食あれば足れりとせよ」

というふうなことをパウロもテモテへの手紙の中で言ってます。

私は仏教の詳しいことは知りませんけれども、やはりいろんな執着を離れるという、そこから始まっているように思うんです。

ルカの福音書の中に面白いお話がありましてね、ある人がキリストのところへ、

「財産分けを命じてください」

と願うんです。キリストは、

「私はなにも遺産分配人ではないよ。あらゆる貪欲に対して人間は警戒しなさい」

と言って譬えを語られた。

「ある人が、大変な豊作になって、もう蔵が余るほどにできあがったので考え込んで、

　『さぁ、今の蔵をつぶしてもっとでかい蔵を建てて、そこへ貯まった豊作の作物を全部しまい込もう。これで数十年間は大丈夫だ。さぁ喜べ、さぁ飲めよ』

と言ったら、神さまが、

　『今晩、あなたの魂は奪われるよ。そうすれば、営々として築いたその蔵の中の富は一体誰のものになるのか』

と。自分の富だけを求める者は空しいんだ」

ということを仰った話があるんですね。

ですから、今仰ったようにやっぱり、

「自分はもう一度金持ちになりたい、もう一度豊かな生活をしたい」

と、それは結構だけれども、その前にやはり、

「失われるものではなくて、失われないものに目を向けなさい」

という、それがではないかと思うんです。

# ●「私が道だよ、真理だよ、命だよ」

そこで、キリストさまの方は、「悟り」なんて仰らなくて、

「私が道だよ、だよ、命だよ。誰でも向こうの世界へ、本ものの世界へ行きたかったら、私にくっついて来い。私を通らないと誰も行けないよ」

と。これはなにも全世界で、あらゆる宗教の中でキリスト教だけだというようなことではなくて、あの時代にあのユダヤの世界の中で、

「あなた方は私を通って行けばまちがいないよ」

ということを仰ったと私は思うんです。なにもキリスト教が独占するとかいうのではなくて、本ものの道は、キリストご自身が本当の道を歩んでいらっしゃる。

**（金光）**これは、死んだらどこかへ行くのではなくて、今この世で生きているときにもう道が、広い道がつながっているということでしょうか。

**（奥田）**はいそうです。私はさっき、死んでからの命のことを申し上げたのは、この世の命だけだったらあまりにもいではないかと、特に私は若いときにそう思っていましたので。

「向こうの世界で素晴らしいものが輝いている。そういうものを今既に、今現にいただいている。だから、余計がんばろうじゃないか、余計向こうで輝くような責任ある生き方をしようじゃないか」

という、なにか張り合いが出てくるという、それを申し上げたいんですね。そうすると、

「いろんな人にいろんな親切をせざるを得ない。こっち側がなにか豊かにされるから、人に対してもいろいろなお役に立つならいろんなことをしよう」

という、そんな心が湧いてきますわね。

**（金光）**そういう救いにあずかると、この世は左で過ごせるのかと思ったら、とんでもない話で……

**（奥田）**とんでもない。それはもう忙しくなるし、この世は修業の場ですわ、本当に。この世で楽していては向こうで楽できません。この世でいろんな苦しみを持った人、いろいろ人のために尽くした人、そういうのが修業なのであって、そういう人は向こうで輝くんです。

**（金光）**でも、それは単なる苦しみではなくて喜びに‥…

**（奥田）**苦しみではない。やっていることが楽しみなんです、喜びなんです。

**（金光）**それまでの苦労だったのが苦労でなくなって、新しい世界が見えてくるし、人間の心も豊かになるし、自分で「では、豊かにしよう」と思っても豊かにはなりませんから。

**（奥田）**なりません。私も定年になってから何年も経ちますよね。普通の人は、私の知り合いなんかは左団扇で過ごして、

「私はゴルフをやってきた。私はどこどこへ旅行してきた」

と、楽しそうに話してくれるんですが、

「それと比べて私は惨めだね」

なんて（笑）。私は忙しくて忙しくて、いろんなところに引っ張りだされて。でも、それがまた私の喜びでもありますね。

「お役に立っている。私を必要としている人がたくさんいてくれている。だから、精いっぱい尽くしましょうよ」

という、そんな気持でおりますので、全然ひがんではおりません（笑）。

**（金光）**いや、まさに幸福の道を歩いていらっしゃるということをうかがいました。どうもありがとうございました。

**（奥田）**いやいや、失礼いたしました。